

グローバル化とローカルな日常経験：韓国地方社会からの展望

著者	本田 洋
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	69
ページ	7-16
発行年	2007-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00001418

グローバル化とローカルな日常経験 韓国地方社会からの展望

本田 洋

東京大学大学院人文社会系研究科助教授

はじめに

トムリンソンに倣って、グローバル化を複合的結合性によって特徴づけられる一つの経験的状况、いいかえれば、近代の社会生活を特徴づける相互結合性と相互依存性のネットワークの急速な発展と果てしない稠密化と捉えれば [トムリンソン2000:15]、日常経験の世界がこのような状況といかに関連付けられるのか——より限定的に言えば、個人の経験においてグローバル化がいかにたち現れ、それを契機として個人の経験世界が外部の諸脈絡といかに接合され、それによって個人の経験がいかに再編成されるのかが、人類学的な観点からグローバル化を検討する際の一つの問題となると思う。他方で、このようなグローバル化の民族誌の構想と、「韓国の人類学」(Anthropology of Korea)が蓄積してきた地方社会に関する豊富な知見¹⁾とのあいだには、容易に埋めがたい間隙が存在するのも事実である。後者が、社会のいわゆる「伝統」的な側面を主たる対象としたものであったとしても、あるいは産業化・都市化やナショナリズムの浸透する過程での変化を視野に入れたものであったとしても [cf. 拙稿1993, 1994]、大伝統、国家、あるいは近代化のインパクトを外在的なものとして捉え、それがローカルな脈絡でいかに受容されたのかを主たる検討の対象としてきた点においては同一の視座に立つものであった。もちろん、グローバル化の民族誌においても、このような問題設定から生活現実を捉えていくことは重要となるであろうが、グローバル化論においてより本質的な問題となるのは、ローカルな経験が顕在的な変化をこうむるか否かよりも、むしろそれが複合的結合性という脈絡の中に位置づけられ、「再帰的」に捉えなおされるという点にある²⁾。すなわち、ローカルな脈絡での意味づけが、そこで完結せず、それと複合的に結合されたさまざまな脈絡で捉えなおされ、それが再びローカルな脈絡にフィードバックされていくということである。

とはいえ、外部の諸脈絡との複合的な結合と再帰的な意味づけというグローバル化論の枠組は、実は「韓国の人類学」で論じられてきた諸事例にとっても決して無縁なものではなかった。村落社会への儒教伝統の浸透によって形成された社会制度や文化伝統の複合(儒教複合)にもこのような性格を見て取ることができるし [cf. 伊藤1993]、この儒教複合との関係で役割が再定義されたような巫俗信仰についてもしかりである [cf.

Kendall 1985]。都市での民俗ブームや文化ナショナリズムの視線が投射されることで、再評価され、再編成されていった農村の民俗芸能の事例においても同様である [cf. 拙稿 1995]。しかし多くの場合、このような複合的結合性と再帰性は、ローカルな経験を結果的にはある均衡状態へと導く動因の一つとして捉えられるのみで、その動的な過程自体が議論の俎上に載せられることは少なかったように思う。

本稿では、「韓国の人類学」を足がかりにグローバル化の民族誌を構想するための準備作業として、筆者が韓国地方社会のフィールドワークを通じて得た知見を、ローカルな脈絡と外部の諸脈絡との複合的な結合と再帰的な意味づけという観点から再検討したい。

1 ものづくりの現場と大衆消費

最初にとりあげるのは、筆者のフィールドにおけるものづくりの事例である。韓国の南原地域は、木製漆塗りの祭器の産地として知られており、「南原木器」という地域ブランドで流通する祭器は、全国のシェアの大部分を占めるといわれている³⁾。南原地域でもともと木製漆塗りの器物、いわゆる「木器」の製造が盛んであったのは、現在の南原市の東南端に位置する山内面で、そこが隣接する慶尚南道咸陽郡馬川面とともに、1960年代の前半までは木器の一大産地を形成していた。この一帯は智異山と呼ばれる山深い山岳地帯の北側に位置し、木器の素材に適した豊富な林産資源に恵まれていたことが、その製造を促した一因であった。くわえて、山内・馬川両面のなかでも特に木器製造がさかんであった諸集落は、おおむね川沿いの急な斜面に設けられており、水稲耕作に有利な立地条件を具えていなかったため、そこで木器作りを含めたさまざまな生計手段が複合的にとられていた。すなわち、ローカルな生態系への適応の一つの形態として、家内工業的に、あるいはその延長線上で、木器製造が行われてきたのだといえる。

これに対し今日の木器製造では、ローカルな生態系への依存度は極めて低くなっている。木器の原材料となる木材や漆・塗料は、国内他地域からの移入、あるいは海外からの輸入に頼っており、木器工場も多くは市街地の外郭や幹線道路沿いに設けられている。逆に、かつての主産地であった山内面・馬川面の深い溪谷に点在する諸集落では、いまではあまり木器が作られなくなっている。

南原地域で製造される木器の祭器が、今日「南原木器」という地域ブランドで全国的に流通していること背景には、産業化によるマーケットの拡大ともものづくりの現場の再編成に加え、祭器の主たる用途をなす祖先祭祀の方式の変化が介在していると考えられる。第一の点については、高度経済成長によって、まず都市生活者の生活水準が上昇し家計に余裕が生じたこと、第二の点については、産地における電気の架設と電動機械の導入、ならびに原材料の安定的な供給により、廉価な普及型の商品としての生産が可

能となったことが重要である。一方、祖先祭祀の方式の変化とは、儒教的な儀礼の様式に則りつつも、都市化や核家族化の影響を受けて、祭祀の方法が最大公約数的にゆるやかに標準化されたことを意味する。従来の祖先祭祀の実践を図式的に整理すれば、名門両班の「家家礼」のような、漢文で書かれた儀礼の正統的なテキストに則り、さらにそれに家門独自の微細な手続きを加え、それを長老の指導のもとに祭祀の現場で伝承するという、漢籍の教養と身体的な訓練の双方によって支えられていた祭祀の伝統を一方の極と見なすことができる。それが正統的な様式を提供しつつも、他方で庶民のあいだでは、そのような正統性、形式性、文字の文化、身体性を必ずしも体現していないような、見よう見まねで時には祈福信仰的な側面をも含みうる形で祖先祭祀が執り行われていたと考えられる。祭器の使用については、儀礼の公的な性格、あるいはそこで祀られる人物の重要性が高いほど専用祭器が使用されるケースが多く見られ、祭器の使用が儀礼の真正さを高める役割を担っていたことがうかがわれるが、他方で家庭における祭祀では、両班の子孫の場合でも、専用祭器と普段使いの食器を併用するようなケースも多く見られた。ましてや両班の伝統への関与度が低く、かつ経済的に必ずしも余裕がなかったような庶民の場合には、専用祭器を使わないような祭祀が主流を占めていたと考えられる。これに対し、1960年代以降の産業化が、マーケットと製造現場の再編成のみならず、このような祭祀の実践にも変化をもたらした。若年・中年人口を中心に村落部から都市部への大規模な人口移動が引き起こされたことによって、名門両班の祭祀の伝統から遠ざかった者も含めて、儒礼の祖先祭祀について大まかな知識はあるが、手本なしに自分たちだけで祭祀を行うのはあやうい、さりとて祭祀に精通した長老が身近にいるわけでもないような祭祀継承者の大量の群れが生み出されたのだと考えられる。このような過程で、祭祀の（下向的に）標準化された（あるいは大衆化された）様式、例えばハングルで書かれた挿絵入りの冠婚葬祭マニュアル等が普及していった。専用祭器、特に比較的廉価で手に入りやすい商品としての木漆祭器の使用も、このような標準化された祭祀の方式とセットになって、いわばもっともらしい祭祀のやり方として、都市の祭祀継承者のあいだに広く普及していったのではないかと考えられる。

諸脈絡の複合的結合と再帰的な意味づけという観点からこの事例を捉えなおせば、都市のマーケットを媒介として、木器生産の現場と都市の家庭での祭祀の実践が結合された状況を見出せる。さらにこのマーケットでは、木器の実用的な価値が貨幣と交換されるだけでなく、その象徴的な意味づけも交換の射程に含まれている。祭器の象徴性は、祭祀マニュアルのような出版メディアのみならず、民俗学者や知識人によるマスメディアを通じた標準化された祭祀の方式の啓蒙や、木器に関連付けられた多様な象徴が提示されるテレビ・ショッピング等の視覚メディアを通じて、広く流通し、共有されている。このような価値の流通が、個々の家庭での祭祀の実践を形作るとともに、生産の現場においては、作られる物の規格化と差異化、ならびに商品としての競争力を高めるため

の付加価値の創出（例えば、地方文化財への指定、地方行政体による品質保証、世代を超えた技能伝承の仮構、木器生産の伝統の創出）を招いている。さらに、木器が廉価な普及型商品として大規模に流通し、それが地域ブランドとして確立したことにより、地方行政体が地域振興の資源としてそれを活用しようとする動きも見せている。木器の生産と消費をめぐる多次元的で複合的な結合性によって特徴づけられる大きな脈絡が生まれ、ローカルな生産／消費がそれに規制されるとともに、それを再生産している状況を見て取ることができる。ここでローカルな脈絡を多元的複合的な大きな脈絡から切り離して論ずることで得られるのは部分的な像に過ぎない。

2 身分伝統とローカルな文化伝統

南原木器の事例からも分かるように、ものの生産と消費、あるいは文化の生成と活用の諸脈絡が、場所の境界を越えて多次元的かつ複合的に結合されることは、場所と結びついた表象の解体を必ずしも招くものではない。木器の事例に即していえば、ローカルな伝統の仮構と関連付けられることが、商品としての木器が場所の境界を越えて展開するマーケットでの競争力を保持することの一助となっているのも事実である。トムリンソンは、グローバル化が、個人々の住む場所と、その文化的な活動、経験あるいはアイデンティティとの関係を根本的に変えてしまうと仮定しているが〔トムリンソン 2000: 186〕、それは決して、近代における文化的ローカリズムの解体を意味するのではない。そうであるならば、どのような状況で文化的ローカリズムが再生産され、逆にどのような状況でそれが解体されるのか。議論を先取りして言えば、場所の境界を越えて生成し拡大する多次元的、複合的な結合の脈絡で何らかの意味づけをされることによって、場所と結びついた表象や文化的な活動が再評価される、あるいはそれとは逆にそこから排除されることによって、ローカルな脈絡においても意味を失ってゆくといった過程が存在すると考えられる。次の事例として、南原地域における吏族集団による身分伝統の形成と、近代性としてのローカルな文化伝統の生成について検討したい。

議論の前提として、19世紀後半の朝鮮の開国と、それに継起する国家の行政機構と儀礼体系の近代化の過程で、法的な身分制が廃止され、在地の身分構造の再編成が進められた点を指摘しておきたい。朝鮮時代後期の地方社会で、地主であり、かつ有徳者として民衆に支配を及ぼしていた在地士族層の間では、これを契機として、邑（道の下位行政区分である郡県等の総称）を単位とする士族共同体の文化伝統の再生産や家門・祖先の顕彰活動、ならびに日常生活における儒教的実践を通じた「両班」（元来、士族の尊称として用いられていたが、儒教的・士族的文化伝統の実践を通じて社会的威信を認められるような理想的な人物像をも含意するようになった）としての威信の再生産が試みられるようになったことが指摘されている〔池承鐘 et al. 2000〕。ここで取り上げる南原

の吏族とは、朝鮮時代後期に郷吏（地方行政の実務担当者）の要職をほぼ寡占的に輩出していた諸家系のことで、彼らの間でも19世紀末から1920年代にかけて、年齢集団を基盤とする結社の再組織やローカルな儀礼への排他的関与、ならびに諸儀礼活動の整備が進められ、その点で身分集団の再組織とそれと関連付けられた文化伝統の形成という社会過程が見られた⁴⁾。

ここでまず注目したいのは、西欧近代世界（ならびに朝鮮に先駆けて近代化政策を進めた日本）との接触以後の早い段階で、ある場所を共有する複数の身分集団が文化的な活動やアイデンティティの再編成を迫られ、いわば玉突き的に、場所との関係で境界付けられる社会集団と文化伝統の再編成を進めていった点である。このうち旧士族は、他地域の士族との間にも、邑を越えた相互結合と相互依存の関係を築いていたが、南原の吏族の場合、他地域の吏族との結合・依存関係は顕著には見て取れず、もっぱら邑の範囲内でのみ、ローカルな集団・伝統の編成を進めていったようである。そこで中心的な役割を果たしていた人物は、吏族のなかでも主導的な家系の出身、あるいは主導家系と婚姻関係によって緊密に結び付けられていた者たちで、その多くは郷吏あるいは武任（地方の軍事・警察の実務担当者）の要職を歴任した者であった。彼らをコアとするようなクリーク（仲間）によって、上にのべたような結社・儀礼の整備、いしかえれば吏族の身分集団の再編成と身分伝統の形成が進められていったものと思われる。さらに、結社への参加とそれを通じた身分伝統への参与は、基本的に自発的・任意的な基盤に基づいており、かつ他地域へ移住した者はそこから排除されていた。すなわち、南原の吏族のあいだで、邑を範疇とする自発的な結社活動を通じて、同じ場所を共有する士族との相互排他性によって特徴づけられるようなローカルな身分伝統が形成されたといえる。

南原の吏族の事例で注目すべき第二の特徴は、彼らの生活の拠点であった「邑内」と呼ばれる市街地が、植民地化以降、多くの流入人口を受け入れ、それには朝鮮人のみならず日本内地からの移住者（内地人）も含まれていたこと（流動性、異種混溶性）と、そこで1920年代以降、都市的基盤の整備や産業振興といった地域開発が展開されていったことである。このような状況のなかで、開発実践において外部の権力・資本と地域住民との間で媒介的な役割を果たす人物（「地方有志」）が、吏族のなかからも出現し、さらにこのような地方有志が、身分的結社の活動においても中心的な役割を果たすようになっていった。また、邑内の都市開発の過程で、文人の社交の場であり、邑内のモニュメント的な旧建造物であった広寒楼が「復旧」され、さらにそれと併行して、南原を舞台とする愛の物語で、語りの芸能パンソリの演目の一つとして朝鮮全土で高い知名度を誇っていた『春香伝』の主人公を顕彰する祠堂（春香祠堂）が新設されたが、吏族出身の地方有志は、このようなローカルな伝統の復興・創造の事業にも関与していた。興味深いことに、広寒楼復旧の記念式と春香祠堂での最初の春香祭祀（遊興文化の担い手であった芸妓が祭官をつとめる）の「余興」として開催された諸行事には、士族・文人の

結社による作文大会、吏族を主体とする武術団体による弓術大会、ならびに芸妓の組合によるパンソリ大会といった諸身分伝統の異種混淆的な併存を見て取れるのみならず、映画、テニスといった「モダン」な娯楽も含まれていた。そして、このような余興と祭祀の複合が、地域の祝祭行事としてその後定着していった⁵⁾。

再構築された諸身分伝統と「モダン」な娯楽のキマイラのな混淆とでもいうべきこの祝祭行事——その後「春香祭」と呼び習わされるようになる——が、地域内の異なる諸身分集団、開発と伝統の復旧、土着の勢力と外来者・新参者（その中には、植民地の本国からの移民も含まれていた）が複合的に交錯する（相互行為の関係にある）場に生まれたこと、さらにそれが解放後も南原という場所へのアイデンティティを語る際に、場所の境界を越えた脈絡で、重要な資源の一つとして動員されるようになったこと、そして地域の開発の資源が、これを中心に再構成・再解釈され、またこれを通じて外部の視線が内部に入り込むこと等々、この事例からも、複合的な結合と再帰的な価値付けの脈絡の形成を見て取ることができる。近代性の一つの結晶であると同時に多元的な諸脈絡の結節点となっているこのローカルな祝祭を軸に、南原という場所と、そこに住む人々の文化的活動、アイデンティティとの関係が再編成されたということも可能である。

春香祭というローカルな祝祭が場所の境界を越えた複合的結合の結節点として機能していることは、その想像力の素材として活用された『春香伝』が、韓国の文化ナショナリズムの財産目録のなかで高い位置を占めてきたこととも関係があろう。南原木器の事例とも通底する特徴であるが、場所との関係を保ちつつも、ナショナルな文化を共有する者の間に成立した物と象徴のマーケットにおいて、それとの関連でローカルなるものが再び立ち現れているのだといえる。そこで次に問題としたいのが、物と象徴がナショナルな脈絡で商品化されることが、グローバルな近代性の形成とどのような関係を切り結んでいるのかである。ここでは、近代に形成された吏族の伝統の一項目をなす関王廟儀礼の展開を前近代まで時をさかのぼって捉えなおすことによって、部分的にはあるが、この問いへの答えを模索したい。

3 中華起源の儀礼と文化ナショナリズム

南原邑内の市街地のはずれに、中国蜀の武将関羽を祀る廟——通称、南原関王廟——がある⁶⁾。これは16世紀末の豊臣秀吉の二度にわたる朝鮮侵攻（壬辰倭乱、丁酉再乱）の際に、当時の宗主国であった明から援軍として派遣された武人によって創建されたもので、このときに南原の他にも地方に三箇所（いずれも前線地）と王都漢陽に二箇所、関王廟が建てられた。王都と地方の関王廟は、肅宗代（1674～1720年）以降18世紀半ば頃までに朝鮮王の命によって補修され、それに伴って儀礼の整備も進められ、年二回、王が香と祝を送って官祭を執り行う慣習が確立された。関王廟と儀礼の整備の背景には、

明を滅ぼして新たに朝鮮の宗主国となった外来王朝清の正統性を疑い、ひるがえって明を思慕する慕明思想の介在が指摘されているが、19世紀末までには清の関羽信仰の要素も導入されるようになっていた。さらに南原の場合、19世紀半ば頃から吏族家系出身者がこの関王廟の維持と儀礼の運営に関与するようになった。

近代以降の南原関王廟の儀礼の再編成は、国家儀礼からの分離と、吏族家系出身者を核とする諸結社の活動を通じた関羽崇拜のローカル化によって特徴づけられる。甲午改革以降、南原の吏族家系出身者は、上述したように諸結社の再編成と儀礼の整備を通じて身分集団の再編成と身分伝統の形成を進めていったが、関王廟儀礼の再編成もこのような脈絡で理解できる。ここで重要なのは、王朝による国家儀礼からの分離に至るまでの関王廟の儀礼が、旧宗主国であり、(ある時期の朝鮮にとって) 中華文明の理念的な中心であった明、ならびに開国以降、朝鮮への干渉を強めていった清との関係のなかで意味づけられ、それが地方でこれを祀る人々の儀礼行為にも少なからず影響を及ぼしていた点である。グローバルな近代性に見られるような「時間と空間の圧縮」[トムリンソン 2000:17] を伴うものではなかったが、ここでもローカルな儀礼の脈絡が国家間関係の脈絡と結合され、そのなかでローカルな儀礼実践が動機づけられ、意味づけられていた。さらに吏族の他の身分伝統と同様に、この事例においても、西欧近代世界との接合が儀礼実践のローカル化を促進する方向に作用していた。

南原の関王廟儀礼は、解放後もしばらくの間は吏族の身分伝統の構成要件の一つとして命脈を保っていたが、吏族子孫の他地域への流出とその身分伝統の担い手の高齢化を一つの要因とし、それに加えて南原木器の地域ブランド化や春香祭の地域祝祭化の背景にも介在していた文化ナショナリズム——なかでも、1960年代以降の産業化を推進した開発独裁と結びついた官製ナショナリズム——の浸透に伴い、徐々に簡略化が進められ、南原という場所との結びつき——秀吉の二度目の朝鮮侵攻(丁酉再乱)の際に南原に「顕霊」し、朝鮮・明軍を助けたという故事——も記憶のかなたに追いやられていった。

ただしここで注意せねばならないのは、丁酉再乱と関連する顕彰行為自体が周辺化したわけではない点である。軍事クーデタで掌握した政権の正統化を重要な目標としていた1960~70年代の官製ナショナリズムにおいては、想像され、創造された「民族」の危機を救った英雄や、異「民族」の侵略に抗戦して殉じた「民族」の戦死者を顕彰する儀礼施設の整備は、むしろ積極的に進められていた。南原でも、丁酉再乱南原城戦での戦死者を集合的に祀る万人義塚の整備事業が、朴大統領の支援を受けて、1970年代後半に実現された。以降毎年ここで慰霊祭が開催され、丁酉再乱400周年にあたる1997年には大規模な記念行事が開催されたように、同施設は、今日の南原の地域住民にとって、ローカルな脈絡からネーションを想像する主要な装置の一つとなっている。

南原の関王廟でも丁酉再乱の戦死者は祀られているが、万人義塚との大きな違いは、それが関羽崇拜の儀礼の一環として行われていることもさることながら、それ以上に、

祀られている者がこの戦いに参戦した明の武人であることだと思われる。中国の武人を追悼する儀礼行為は、中華文明との接合がローカルな脈絡の中での社会的威信とも密接に結びついていた状況のもとでは積極的な動機付けを含むものであり、さらに吏族の身分伝統の一要件となってからも、ローカルな脈絡を超えたある種の普遍的な価値を担われ、それをローカルな脈絡と接合する装置として機能していたが、ナショナリズムの脈絡ではむしろ排除されるべきものとなっていったのである。事実、吏族の子孫のなかにも、関王廟儀礼を、父祖・先人の遺志を継ぐものと意味づける一方で、なぜ中国の人を祀らねばならないのかという疑問を呈する者も相当数存在する。すなわち、この事例から、身分伝統の再生産やローカルな文化伝統の構築の脈絡においても、ナショナリズムとの接合が顕著に見られるようになってきていることを確認できる。

おわりに

「韓国の人類学」を足がかりにグローバル化の民族誌を構想するための準備作業として、本論では、ローカルな脈絡が外部の諸脈絡と複合的に結合されることによって、ローカルな実践が再帰的に意味づけられ、形作られていく過程を、筆者がフィールドで遭遇した三つの事例を通して考察した。第一の木器生産の事例では、祭器の生産をめぐる、単にものとしての実用性が取り引きされるだけではなく、祭祀の標準化された伝統やその真正さ（あるいはもっともらしさ）を補強する諸表象が流通するような複合的な場が生まれ、それによってローカルな生産／消費が拘束されている状況が読み取れた。木器に関連するローカルな伝統の仮構も、このマーケットにおける商品としての付加価値の創出と関係していた。第二の吏族集団と地方祝祭の事例では、西欧近代世界への接合により、吏族の身分集団と身分伝統が場所との関係で再編成されたこと、そして彼らの生活の場であった邑内に、人口の流動性と異種混雑性を背景として、諸身分伝統とモダンな娯楽のキマイラとして成立した春香祭という祝祭行事が、地域の人々の文化的活動やアイデンティティと場所との関係を再生産する装置として機能してきたことを示した。この事例では、ローカルな脈絡の近代世界との接合と近代性の構築の過程で、地域の人々の経験世界と場所との関係性を再定義しうるようなローカルな伝統が新たに生み出された点が重要であった。第三の南原関王廟の事例からは、朝鮮と明／清の関係という、国家の境界を越えた関係性の脈絡で生み出され、意味づけられてきた地方儀礼が、王朝国家との関係の断絶を契機として、土着の身分集団によって囲い込まれ、ローカルな身分伝統の一部をなすものとして流用されていったこと、そしてこの儀礼の実践が文化的ナショナリズムの脈絡と接合されることによって、儀礼と場所との関係付けが見直されていったことが確認できた。

グローバル化との関連で以上の議論を位置づければ、人間の運命同士が単一のグロー

バルな枠組の中で結びつけられていくような（すなわち外部が消されてゆくような）複合的結合性の増殖としてのグローバル化の過程にも、必ずしもそれに収斂しきらないようなさまざまなサブストーリーが存在するということである。なかでも本論では、グローバルな近代性の増殖とローカルな実践とのあいだの中間で形成され、再編成されてきた結合の諸脈絡に着目した。グローバル化が外部をなくしていく、あるいは人々の住む場所と文化的活動やアイデンティティとの結びつきのあり方を根本的に変えてゆくという命題に異議を唱えるつもりはないが、他方で、グローバル化の枠組に還元しきれないような微細な社会過程にも注意を払うことが、グローバル化の民族誌をより豊かなものにするのではないだろうか。言い換えれば、従来の「韓国の人類学」の方法論の特徴の一つであった繊細な腑分け作業を、ローカルとグローバルの間に形成され、交渉される諸脈絡とインターフェース（界面）にも施して行くことが必要とされているのである。ありきたりの結論であるが、それを、いかに民族誌を通じて実践してゆくのが、我々に問われているのだと考える。

注

- 1) [Shima & Janelli eds. 1998], [嶋・朝倉編1998]等を参照のこと。
- 2) 例えば、犬を食べることが欧米の動物愛護団体から非難され、それがオリンピックやサッカーワールドカップといった世界的なスポーツイベントの開催を契機として国家の威信という政治的な脈絡で再解釈され、さらにそれが人々の日常的な生活での犬食行動を規制したり、逆に民族の文化としての犬食の再評価につながるといった一連の過程を考えればよい [cf. フェルトカンパ 2006]。
- 3) 南原地域における木器製造の歴史と、近年の「南原木器」の商品としての性格については、すでに [拙稿2006 a] で論じたことがある。
- 4) 詳細については、[拙稿2004]を参照のこと。
- 5) 植民地期南原邑内の開発と春香祭の成立、ならびに解放後の展開については、[拙稿2006c]の3・4章を参照されたい。
- 6) 南原における閔王廟儀礼の展開については、[拙稿2006 b]を参照のこと。

文献

池承鐘・金俊亨・許捲洙・鄭震相・朴再興

2000 『근대사회변동과 양반』 서울: 아세아문화사。

フェルトカンパ, エルメル

2006 「愛玩犬と食用犬の間——現代韓国社会の犬論争に関する一考察」伊藤亞人先生退職記念論文集編集委員会編『東アジアからの人類学——国家・開発・市民』pp. 181-193, 風響社。

本田 洋

- 1993 「墓を媒介とした祖先の<追慕>——韓国南西部一農村におけるサンイルの事例から」『民族学研究』58 (2), pp.142-169。
- 1994 「韓国家族論の現在——全羅北道南原郡一山間農村の事例から」『朝鮮学報』152, pp. 109-166。
- 1995 「郷土芸能はだれのもの? ——現代韓国農村における民俗伝承の側面」『朝鮮文化研究』2, pp.141-172。
- 2004 「吏族と身分伝統の形成——南原地域の事例から」『韓国朝鮮の文化と社会』3, pp.23-72。
- 2006a 「商品としての南原木器——韓国のものつくりに関する一試論」伊藤亜人先生退職記念論文集編集委員会編『東アジアからの人類学——国家・開発・市民』pp. 3-18, 風響社。
- 2006b 「邑治の儀礼空間と近代——韓国南西部南原地域の吏族と閔王廟の事例」西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ』pp. 329-348, 世界思想社。
- 2006c 『韓国の在地エリートに関する社会人類学的研究』課題番号: 14510332, 平成14年度～17年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書。

伊藤亜人

- 1993 「東アジアの社会と儒教——韓国の民族誌による展望」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える [1] 交錯するアジア』pp. 53-76, 東京大学出版会。

Kendall, Laurel

- 1985 *Shamans, Housewives, and Other Restless Spirits: Women in Korean Ritual Life*, Honolulu: University of Hawaii Press.

嶋陸奥彦・朝倉敏夫編

- 1998 『変貌する韓国社会——1970～80年代の人類学調査の現場から』第一書房。

Shima, Mutsuhiko & Roger L. Janelli (eds.)

- 1998 *The Anthropology of Korea: East Asian Perspectives* (Senri Ethnological Studies no. 49), Osaka: National Museum of Ethnology.

トムリンソン, ジョン [片岡信訳]

- 2000 『グローバリゼーション: 文化帝国主義を超えて』青土社。(原典は, John Tomlinson 1999 *Globalization and Culture*, Cambridge: Polity Press.)